
ただの、どこにでもいるふつうのメイジですからっ!

普通

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただの、どこにでもいるふつうのメイジですからっ！

【Nコード】

N9436Y

【作者名】

普通

【あらすじ】

ありがちなゼロ魔にオリ主転生モノ。本人は主人公になどなりたくないけど、うっかり首を突っ込んで途中で引けなくなるタイプ。原作のことは遠い記憶の彼方で、臆げな記憶を頼りに、原作どおりになるようしようと頑張れば頑張る程、明後日の方向に事態は進んでゆく。主人公の座右の銘は「明日から頑張る。」
チート具合はテラチートという言葉も生温いぐらいのチートなのでドン引きするかもしれませぬ。さらに基本的にオリ設定の嵐です。こんな地雷いっぱいのはずですが読んでくれる人がいたら嬉しいで

५.

登場人物紹介&設定資料集(前書き)

本編に登場するオリジナル設定、人物、アイテムなどの紹介を行うコーナー。本編の進行に沿って順次追加されていく予定。

登場人物紹介&設定資料集

人物

エドモン・デイチロ（江戸門一郎）

イチロ伯爵家の長男。本編の主人公。前世の記憶を持つ転生者。ただと原作知識に関しての記憶はかなり曖昧。具体的に言くと、序盤と水着回とおっぱい回ぐらいしか流れを覚えていない。愛称はエド。

ミネット・ド・シロー・ジロ（嶺戸四郎次郎）

ジロ子爵家長女。澆刺としたアクティブな娘。本来、分家筋の中で最もインドア色の強いジロ家の者でありながら、アウトドアな活動を好む。脳筋というわけではないが、年から年中デスクワークとこの中には気が滅入る、とは本人の談。エドモンの婚約者。風メイジ。

ランブレ

イチロ家に代々伝わるインテリジェント・スタッフ。性格は擦じ曲がついて、話をややこしくするのが好き。基本的に事態を引っ掻き回して面白可笑しくするのが生き甲斐。これでも一応、イチロ家最上級の家宝。普段はイチロ家の当主の杖であるが、2、3世紀に一度ぐらいの頻度でイチロ家に連なる者がサモン・サーヴァントを行うと召喚されることがある。

トウーサン・デイチロ（東山一郎）

イチロ伯爵家現当主。エドモンの父。だいたいいつも仕事で忙しくしているので、エドモンが実家にいるときでも、週に一回ぐらいしか捕まらない。水メイジ。

クロエ・ラ・シモーヌ・ディチロ（黒江左衛門一郎）

イチロ伯爵夫人。エドモンの母。息子にイタズラするのが好き。おっぱいは大きい。火メイジ。

設定

イチロ伯爵家（一郎伯爵家）

アーシャ・イチロ（蘆屋一郎）を初代とするトリステイン貴族。本来は蘆屋伯爵家となるはずだったが、巡り合わせと彼の性格のせいで後世にこの家名が残ってしまった。トリステイン南東に領地を構え、現在では近隣の分家の領地も含めるとガリア・ゲルマニア双方と国境を接しているという、トリステインでも最も運営の難しい領地の一つと言われている。

主要な分家にジロ子爵家、サン・シロウ子爵家、ゴロー子爵家、ロクロ子爵家、ハチロ男爵家、クロー男爵家がある。分家衆の傘下の下級貴族も含めるとトリステインではまあまあの派閥勢力を成しているが、基本的に領地ヒキコモリで閉鎖的なので、王家の召喚でもない^{アカデミー}と王の生誕祭と降臨祭のぐらいにしか宮廷には顔を出さない。魔法研究所とは昔から折り合いが悪い。

紋章は本の表紙をバツクに杖とペンが交差している物で、それぞれの家の家訓が本のタイトルの位置に刻まれている。例えばイチロ家の場合『探せ、然らば見出さん。』

ジロ子爵家（次郎子爵家）

身内には二の家と呼ばれる。歴史を司る分家。イチロ派閥の外交や経済などの運営を担う。イチロ派閥の家臣団の実務者レベルの代表はだいたい二の家傘下の者の出向である。風メイジが多い。

出来るだけ穩便に物事を進めることを是とし、『戦いを回避する努力を行わない者は敗北主義者である』が家訓。

ゴロー子爵家（五郎子爵家）

身内には五の家と呼ばれる。収集を司る分家。イチロ派閥の軍事や警備の運営を担う。他の分家の依頼を受けて試料の採取なども行っている。

調査や採取には幻獣や珍しい植物・鉱石などもあり、幻獣や亜人の跋扈する険しい山や森に分け入っていく、イチロ一門随一のアウトドア派。また任務の性質上、生け捕りや損傷度合の加減が必須となり、それ故イチロ一門の中でも珍しく近接戦闘に好意的で、一番の武闘派。火メイジが多い。家訓は『恐れを忘れる勿れ。』

普通に原作開始

ここはハルケギニアはトリステイン、由緒正しい貴族の子弟の魔法の学舎、トリステイン魔法学院。今日は2年生に進むために必須である、春の使い魔召喚の儀式が執り行われている最中です。

私は所謂ところの転生者とかいうもので、なんと驚き、前世の記憶を持っています。その前世の記憶の中では、この世界はゼロの使い魔というライトノベルとして登場していました。

ここは魔法を使えるメイジという人たちが存在し、中世レベルの文明で、貴族が絶大な力で平民を支配し、亜人や幻獣が跋扈する一級危険世界なのです。それも、私が生まれたトリステインという国は、伝統があるものちっちゃくて弱っちい国家、それも物語の中では主人公達が活躍しなければ滅んでしまう程です。

私が最初にこの世界が”あの”ハルケギニアだと気づいたときは、貴族の家に生れたことを神に感謝し、もし魔法学院に行つて物語の”ヒロイン”であるルイズ・なんとか・アリエール嬢がいたりしたらどうしよう、と悩んだものです。

もちろんいましたよ、隣のクラスに。神って呪い殺せるんでしょうか？

”原作”の冒険に巻き込まれないよう仮病をでっちあげて、2、3年の間学院を休学しようとも考えましたが、私の家がある以上、ここは物語とは違う平行世界ということになります。もしそのせいで物語どおりに主人公が現れず、ヒロインが覚醒してくれないと、私の国はなくなってしまう、家も潰れてしまいます。

流石に中世レベルの文明で平民暮らしなんてゴメンなので、すごく、すごく気が進まないのですがヴァリエールさんが伝説の使い魔・ガンダールヴの斎藤を召喚して、伝説の系統・虚無に覚醒する

まで影からこっそり見守ることにしました。ええ、見守るだけでも。

「儀式、次。」

なんかちんまい青髪の少女にクイツとマントを引っ張られたような気がしますが、きつと気のせいです。

「風竜を召喚するなんて、さすがタバサね！ 私も火竜呼べるかしら？」

「きゅいきゅい。」

ウキウキしながら杖をぶんぶん素振りしている褐色肌に赤髪のグ
ラマラスなおねいさんと、独特の啼声をするドラゴンが視界の片隅
にいますが、これもきつと目の錯覚でしょう。

物語はこの使い魔召喚の儀式から始まっていましたが、よく考え
ればごく当たり前のことですが、その前に一年間同じ学院で暮して
いるのですから、関係者にエンカウトするのは当然なのに。

そもそも十年以上前のアニメの内容なんて細かく覚えていないの
は当然じゃないですか！ しっかり覚えているのは胸革命と日野理
恵ラジオによく萌えたことぐらいですよ！

私のゴロゴロハルケギニアライフ計画を危険イツパイワクワクハ
ルケギニアアドベンチャーにさせないためにも、頑張らなくては。
明日から。

「人生諦めが肝心。」

雪風のように冷たく鋭い言葉で私の現実逃避を一刀両断する青髪
の少女に促され、私は広場の中央に進み出ます。

「我が名は、エドモン・ディチロ、五つの力を司る五角形^{ペンタゴン}、我に相応しい使い魔を召喚せよ。」

銀色の人間大の鏡のような扉^{ゲート}が宙に浮かぶ。

私の中で運命の扉がギシギシ音を立てながら開いた、そんな気がした。

普通の使い魔（だったらよかったのに）

銀色の鏡から現れたのは、散切りの黒髪に神経質そうな目をした、細身の中年の男性だった。

男は白のマントらしきものを着けていたので、ギリギリ貴族に見えなくもないが、とにかく身なりからして怪しいのだ。

ゴツイ竜革らしきブーツを履き、真つ黒なゴム製の分厚いエプロンをかけ、目元を広く覆う大きな眼鏡をかけている。極めつけは、貴族の象徴たるマントには小物を入れるポケットのようなものが設けられている。それも、いきなり召喚されたにもかかわらず、男はそれを気にした様子もなく、手に持っていたノートにペンで何かを書き込み続けている。

儀式を監督する立場であり、立会人でもあるコルベール教諭も、先ほどから男の振る舞いに呆然としている。すっかり静まり返ってしまった広場には、風の音と男がペンを走らせる音が妙に大きく響く。

そんな緊張の糸を切るかのように、再起動を果たしたコルベール教諭が男に声をかけようと一步を踏み出したところで、機先を制するように男はノートから顔を上げ、姿勢を正して口を開く。

「久しいな。」

その言葉は、ハッキリと私に向けられたものだった。なぜか、コルベール教諭の肩が一瞬ビクリと跳ねたように見えたが、私は気にせず男に返事をする。

「はい、父上。一年ぶりになります。父上は相も変わらず不健康そんな生活をしていらっしやるようで何よりです。」

「ふん、貴様とて大差は無いだろう。休みにも顔を見せないで何をやっているのかと思えば、^{レポート}転移魔法でも使えるようになったのか？」

私が召喚した男の名はトウーサン・デイチロ、私の父であり、イチロ伯爵家現当主殿である。

昨年の長期休暇に帰省しなかったことに未だ御立腹なのか、言葉が刺々しい。

「いいえ、ただの召喚ですよ。^{サモン・サーヴァント}全く、何がどうなっているのやら。是非解剖して調べさせて頂けませんかね。」

「ふむ、魅力的な提案だが、丁重に断らせてもらおう。使い魔のルーンは心臓が止まると消えてしまうらしいからな、やるだけ無駄だ。」

「ちつ。」

私達親子の心暖まるやりとりの中てられたのか、周りがまた空気になっていく。そんな空気を打ち壊すかのように、明るい若い女性の声が割り込む。

「へいへい、今日の主役のこの私、スーパーキュートなアンブレちゃんを無視しないでください。いい加減私も怒っちゃいますよー？」

私の使い魔らしき奴は、とうとうプンポンという擬音を態々魔法で宙に描いたりし始めている。

いや、先ほどからピカピカ発光してしきりに存在をアピールしていたのだが、親子そろって無視していたのだ。

父の右手に納まっているペンは、その名をランブレという。イチロ家に伝わる由緒正しいインテリジェンス・スタッフであり、性格

はあんなんだが、一応、代々イチ口家の当主の杖を務めているのだ。父と私は疲れたように額に手をやり、同時に溜息をつく。しかし私は、父の口元が一瞬ニヤけるのを見逃さなかった。ランブレを厄介払いできるのが其れほどまでに嬉しいらしい。その気持ちはよくわかる。

「さあさあさあ、私達の熱いヴェーゼを皆さんに見せつけてやりましょう！ エド君のファースト・キスを散らすのがアンブレちゃんになるなんて予想外の展開ですが、ダイジヨブ！ ミネットちゃんには内緒にしておいてあげますから！」

この性格さえ無ければ優秀な杖なのに、こいつを作った奴は何を考えてこんな性格にしたのか。ただでさえ原作開始を思うと今日から憂鬱なのに、コイツの相手が加わるなんて。

何時も暇を持余しているランブレのことだから、これからの数々のイベントに出会うたびに事態を面白可笑しくする方向に尽力するに違いない。さすがにトリステインが滅ぶような場面では遊ばないと思うが、平穏な日常からは物凄い勢いで遠ざかっている気がする。悟りの境地ってこんな感じなのかな、と穏やかな笑みを浮かべながら、私は投槍にコントラクト・サーヴァントを唱えてランブレにキスをした。

「内緒も何も、ミネットは今年から学「しゅごあい、エド君の熱いカ」のがアンブレちゃんのナカに入ってくるう」院に通っているぞ？明日には知れてるんじゃないか？」

「は？」

「貴様まだミネットと顔を合わせてないのか？ もう入寮して2週間経っている筈だぞ？」

父上の言葉に一瞬で現実に引き戻される。ハトコであり私の婚約者でもあるミネット・ド・シロー・ジロは、学院は通わない予定だったはず。というか、私が学院を卒業と同時に入籍というスケジュールまで決まっていたはずが、一体どうなっているのか。

大冒険 原作イベントにあの御転婆アクティブな少女の世話まで加わるなんて悪夢のような未来予想図に、溜息が零れる。

「ちょっと父上とOHANASHIがありますので、今日はここで早退させて頂きます。」

再び固まったまま啞然としているコルベール教諭にそう断り、父を連れて立ち去るのだった。

あれ？ 今日の目的ってヴァリエールさんがちゃんと斉藤君を召喚できるか確認することじゃなかったっけ？

普通の婚約者 前編

父とのOHANASHIは流れてしまった。というか、父の杖は私が貰ってしまったのでそもそも勝負が成り立たない。その父は隣で使い魔を通して王都トリスタニアまで迎いを出させ、さつさと帰る算段をつけている。将来の義理の娘も居るのだし、顔くらい見せていっても良いのに、そんな気は更々ないようだ。

父を厩舎まで送った別れを告げた後に、私は真っ直ぐ一年生の授業が執り行われている教室へと向かった。どうせヴァリエールさんのサモンサーヴァントで今日の授業は殆ど潰れるのだ、少しくらい寄り道しても問題ないだろう。

一年の教室の前に着いた時は、丁度今日の授業が終わったところのようで、教科書や筆記具を抱えた、まだ茶色いマントの一年生達を教室の扉からぞろぞろと吐き出している。

その中に、ダークブロンドのポニーテールを腰まで伸ばした後姿を見つける。多分、あれがミネットだろう。トリステインではあそこまで暗い色は珍しい。一年前の冬に見た時よりも若干色合いが濃くなっているが、うちの連中ならばまだ薄いくらいだ。

「ミネット。」

「お兄様、お久しぶりでございます。」

私の呼びかけに答えて小柄な少女が優雅に振り向き、スカートの隅を摘まみつつ澄んだ声色で挨拶を返す。釣り目がちの漆黒の瞳にキリッとした眉、そして、その鋭さを打ち消すような優しいげな微笑みを浮かべた少女がそこにいた。

「だ、誰だてめえ!？」

思わず言葉遣いが乱暴になってしまった。だが、私は今、何らかのスタンド攻撃を受けているッ！ 姿形は一年前のミネットをそのまま拡大コピーした様にそっくりだが、キャラが可笑しすぎる。断じてうちの婚約者殿は優しい微笑を浮かべて御機嫌ようとか挨拶するタイプの人間じゃねえ。

その証拠に、さっきはミネットには内緒と言いながら、実際に本人に会ったら無いこと無いこと吹き込む気だったランブレも、あまりのことに完全にフリーズしている。

そうだ、この子、食堂とかで何度か見掛けたことがあった。誰かに似ていると思っていたんだが、キャラが違い過ぎて良く似た別人だと思っただけだったんだ。

混乱で完全にフリーズしている私に業を煮やしたのか、ミネット（？）は徐に杖を取り出すと、呪文を唱え、正気に戻った時には私は窓から飛び出していた。この魔法行使は覚えがある、やはり間違はなく、私をお姫様抱っこしてニヤついているのは真正銘ミネットだ。

背後から上がるキヤーという黄色い歓声は極力気にしないことにした。

五階の寮塔の部屋に窓から入る。ここがどうやらミネットの部屋らしい。デカイ氷室に、窓まで続いているダクト。刃物や工具が詰まっているラックに、大理石、木、金属と三種類も用意されている、一見無駄のようにも見える作業台。その上には魔法のバーナーとサラマンダー革のゴツイ手袋が無造作に置いてある。まるで自分の部屋に帰ってきたような気分だ。寮室をこんな風に改造するのはうち

の人間ぐらいだろう。少なくとも一般的な女の子の暮らす部屋ではない。

「で、お兄様ってどこの誰だ。熱でもあるのか？」

「お兄ちゃんって呼ぶとセンパイが喜ぶってお義母様が言ってたんだケド。」

心外だという顔をしてぶうつとふくれるミネツトさん。婚約者として張り切ってくれるのは嬉しいが、お前、方向性はそれでいいのか？ それよりも母上^{クロエさん}ミネツトに何吹き込んでんすかー。どうやら私は母に妹萌えだと認識されているらしい。確かに妹は猫可愛がりしているが、断じて妹萌えではない、はず。

「ふい〜。今日も疲れた。肩がこるぜい。」

さっきの雰囲気とは打って変わって、仕事帰りのおじさんのようにぐるぐる腕を回しながらポスンとベッドに腰掛けるミネツト。

「はっ、夢か。」

「夢じゃねーよ、センパイ。まあ新学期早々にちよつとやらかして今さら猫脱げねーんだよ。ほら、イトウだっけ？ 何かにつけてはイチイチ風が最強とか言う教師知ってる？」

「ギトー先生だ。ここの教師陣はだいたい皆、自分の系統こそが至高だと思っているが、声高に主張して憚らないのは彼ぐらいのものだ。まあ、あれでも偏在が使えるんだからそうなるのもしょうがないとは思っが。」

「でさ、うちのクラスの娘がネチネチいじめられて泣かされちゃつてさ、つい、ね？ 学生相手だからといって、あんまり舐めた授業してると足元掬われますよって、それとなく注意を促してみたのよ。」

「ね？ じゃねーよ！ この間の風系統の授業が急遽無くなったのお前のせいだったのか。それとなくって意味、ちゃんと解ってるのか？」

「まあその件でクラスのヒーローみたいになっちゃって、庇った娘からはなぜかキラキラした瞳で御姉様とか呼ばれるようになってさ。いまさら地がこんななんだって言い出せねーんだよ。まあ、アタシの話はこれぐらいでいいじゃん。それよりセンパイたち二年生は今日は使い魔召喚の儀式だったんだろ？ こんなとこで油売ってていいの？」

「これぐらいって、はあ、入学一月目でこれか。なんだかつつけばもつと出てきそうだな。」

あからさまに話を逸らされたが、まあ、人間知らない方がいいことって世の中あるよな、うん。学院に入学した直後、オールド・オスマン直々に呼び出され、君はくれぐれも自重するようにと必死に釘を刺された理由が、今さらながらなんとなく察せられた。きつとうちのOBの連中はこんなのばかりだったんだろう。

私は知らなかったんです！ よし、理論武装完了。何かあったら全部父上に丸投げしよう。

「使い魔召喚の儀式は長くなりそうだから自主休講になったんだよ。それで私の使い魔だが、」

「呼ばれて、飛び出て、ジャカジャカジャーン！ アンブレちゃん登場！」

勝手に持って行った人の精神力で、これでもかという程の魔法で光る星を散らしながらランブレが名乗りを上げる。

「お義父様の杖？」

「そのとおり。今日からはエド君の杖兼使い魔兼終生の伴侶ですけどね。」

「伴侶って間違っちゃいないが、はあ。」

「あれれ、反応薄いですよー、ミネットちゃん？ もっと、こっつ、キーツ悔しい、ドロボー猫め！ みたいな反応してくれないとアンブレちゃん楽しくありません。」

「や、だってランブレ、その、杖じゃん、なあ？」

「くう、それは気にしたら負けです。」

「それに齡4500歳のババアだし。」

「アンブレちゃんは永遠の十七歳なんですー！」

そう叫ぶと、ランブレは私の精神力を使ってフライの魔法で窓から飛び出して行ってしまった。つーか、ミネットも杖の戯言ぐらい聞き流せよ。変なところで負けず嫌いなのは変わらないな。あつと
いう間に見えなくなる新しい相棒を見送りながら、きつと明日には『怪奇、空飛ぶペン』なんて噂が流れるんだらうなとボンヤリと考

え
た。

普通の婚約者 前編（後書き）

メインのオリキャラはこの3人（？）でひとまず終了です。次回はバトルパートの予定。

主人公の親類縁者はチヨイ役や番外編があれば出てくるかもしれないが、何時になることやら。

設定資料集と登場人物紹介を整理していたらいつのまにか40KBを超えていたので、全部出てくることは多分ないですが。

普通の婚約者 中編

一体何でこんなことになってるんだか。やれやれだぜ、とどこかのスタンド使用のようなセリフが漏れる。

今、私は『風』と『火』の塔の間、ヴェストリの広場の真ん中、数多の野次馬に囲まれている。目の前に対峙するは、我が婚約者ミネットさん。わけがわからないよ。

事の起こりはこうだ。ヴァリエールさんにご飯を抜きにされたらしい彼女の使い魔君を可哀想に思ったメイドさんが食堂でご飯を食べさせてあげ、そのお礼として使い魔君は仕事のお手伝いをしていたそうだ。なんだそのリア充みたいなフラグの立て方。

そんな親切な使い魔君はギーシュ君の落とし物を拾ってあげたそうだ。しかしながら、その落とし物の香水を発端として、みるみるうちにギーシュ君の二股が発覚。ギーシュ君はやり場のない悲しみを目の前にいる使い魔君に八つ当たりして発散しようとするが、自分以外のリア充は許せない使い魔君はギーシュ君を挑発、結局、決闘沙汰に相成りましたとさ、まる。

昼食後の暇つぶしの散歩をしていたランブレによるとさういうことらしい。ここまでは、なんか記憶と展開がちよつと違う気もするが結果は問題ない。というか、その記憶自体もう結構テキトウなので次のイベントが確か盗賊編なのと、アルビオンにいつてくるとタルプで飛行機にのったヒロインが覚醒、ぐらいいしか覚えていない。しかし、続きが問題だ。

颯爽と食堂を去って行くギーシュ君。やっていることは二股野郎の噂をもっとインパクトのあるイベントで上書きするという、とて

もカツコイイものとは思えないものだが。しかし、そこに立ちふさがる影が、二つ。

「いやあ、カツコイイですね、グラモン先輩。」

女の子にカツコイイと声をかけられ反射的にやけてしまうギーシュ君。しかし、次の言葉を聞いた瞬間、その顔は真っ赤になり、声をかけてきた少女の後ろを見て青くなる。

「なにせ、二股かけて女の子を泣かせておいて、礼儀を教えてやるう、ですからね。礼儀知らずな私にはとてもできないことです。そういうえば、恥かしながら浅学な私にはグラモン先輩の仰る薔薇の存在の意味というのも、とんと理解できないのですが、これも丁度いい機会ですから、そのヴェストリの広場で合わせて御教示願えませんか。」

慇懃無礼にそう言い放つ小柄な少女と、その少女の影に隠れるように、マントをちょこんと掴んでしくしく泣いている栗色の髪の少女。共に茶色のマントを付けた一年生で、ミネットとラ・ロツタ嬢だった。

ミネットは、御姉様格好良いとウツトリとした表情で抱きつく、自分より大きな少女を、よしよしと頭を撫でてあやし、言うべきこととは言ったと、さっさと踵を返して出て行ってしまった。

ギーシュも先ほどチラツとお互いの杖に送られていた視線から、ミネットが何を言わんとしているのかは理解できた。つまり、うちの娘泣かした落とし前つけちやる、決闘じゃ、ということなのだろう。しかも場所まで指定して。ここでヴェストリの広場に行かなければ、彼女からだけでなく、平民との決闘からまで逃げたことになってし

まう。しかし行けば、どちらが先にしる結局彼女との決闘は避けられないだろう。弁解の機会は意表を突かれて固まっている間にすっかり失われてしまっているし、ギャラリーは既にギーシュを置いてきぼりにして盛り上がってしまったている。先ほどとは打って変わって、ギーシュはとぼとぼと食堂を後にした。

「とゆー訳なんですよ。いやー、ミネットちゃんは順調に御姉様化ヒロインしてますね。これで男の娘だったらパーフェクトなんですが、いやー惜しいことです。」

何時も通り、脳みそ空っぽで能天気なランブレの発言を総スルーしてヴェストリの広場に急ぐ。ここでギーシュ君がミネットにボコられて使い魔君の決闘イベントが起きないと、伝説の剣ストームプリンガーが手に入らない。原作2日目でもうトリステイン終了の危機とか冗談じゃない。決闘を治める良い方法なんてさっぱり考え付かないが、とりあえずランブレにフライを使わせ、文字通り飛ぶ様に翔けた。

ヴェストリの広場に着いた時には既に人だかりが出来ていて、その輪の中ほどには既にミネットが立っていた。私もフライでその輪の中に降り立つと、騒がしかった野次馬達が輪をかけて五月蠅くなる。ギーシュ君は丁度到着した所だったのだろう、目の前に降ってきた私と目が合い、ポカンとしている。私は運がいい、彼が呆けている間に言質を取ってしまおう。

「やあ、ギーシュ君、いまから決闘らしいけど、調子はどうだい？」

「ああ、そうだねエド、悪くはないかな。」

ギーシュ君はどこか歯切れが悪そうに答える。まあ、そうなる理由を私は知っている。

「君には悪いのだけれど、彼女との決闘は取りやめにして貰えないかな？　大丈夫、彼女には私の方で話をつけるよ。」

「や、でも、その。」

「ギーシュ君は女の子に杖を向けるのが嫌なんだよね？」

そう、どこか価値観がずれている所があるが、何だかんだでギーシュ君は基本的にこういう人柄なのだ。言葉に詰まるギーシュ君にさらに言葉を重ねる。

「実は、彼女、ミネットって言うんだけど、私の婚約者なんだ。もし彼女になにかあったら、とても悲しいことだけれど、私は君に決闘を申し込まなくてはならない。」

それを聞いてギーシュの顔が引きつる。私は昨年ギーシュと同じクラスだったので、彼は私が学年に3人しかいないトライアングルの一人だということ良くを知っている。相手は年下の女の子ということだけでさえ気持ちの乗らない決闘で、相手はやる気満々、しかも相手に怪我をさせたら2ランク上のクラスメイトとの決闘のおまけつき。

ちょっとした憂さ晴らしのつもりで始めたのだったが、なぜか逆にストレスが溜まる一方だったギーシュは、ホツとした様な顔で肯く。

「じゃあ頼めるかい？　薔薇の棘は乙女の指を傷つけるためにある訳じゃない。無粋に摘み取ろうとする不埒者を制すためにあるのだ

から。」

ちらつと、ヴァリエールさんの使い魔君に視線をやると、ギーシユ君はすんなり引き下がっていった。あとはミネットにアイコンタクトで退くように伝えれば万事が原作通り、丸く収まるってわけだ。

「あら、お兄様も二股かけて、恋人を泣かせるタイプの方だったんですか？ このミネット、とても悲しいですわ。」

藪蛇だった。ウルウルと涙目で悲しそうな表情を浮かべるミネット。でも、ちょうどいいからそのまま泣いた振りのまま走り去ってくれ。

「婚約者である私の側ではなく、グラモン先輩の方に立ったのが何よりの証拠、ええ、許せません、決闘を申し込みますわ！」

ダメだった。というか、何故そんな展開になる。確かにミネットとギーシユ君の決闘は回避できたが、代わりに私が決闘する羽目になるうとは。

先ほどの涙は何処にいったのだろうというぐらい鋭い表情をしたミネットが杖を抜いて佇む。

そして、時は冒頭に戻る。

よくミネットをみるとその口元はニヤケが抑えきれしていない。恐らくミネットは、ギーシユ君との決闘が私にとって不都合なのを理解した上で、退く報酬として自分と決闘しろということなのだろう。年々女の子らしさが消えていくミネットに呆れながらも、このまま私が退いて使い魔君の決闘も流れてしまっただけは元も子もないので、仕方なくランブレを構える。お互いの間に流れる空気が張り詰める。まるで時間が止まったかのように静まり返った中、二つの朗々とし

た声が響く。

「『幻惑』のミニット

「『カ』のエドモン」

「杖に誓い」

「いそ尋常に」

「勝負」

普通の婚約者 中編（後書き）

バトルまでつかなかった。

普通の婚約者 後編

エドモンは闘いの開始と同時にしゃがみ込み地に手をつくると、素早く錬金の魔法を発動する。すると、十本以上の剣が大地に突き立つような容で生えてくる。彼が立ち上がり杖を指揮棒の様に振りながら魔法を行使すると、剣は地面から浮かび上がり打ち出される。周りの観衆に被害が及ばぬように角度を付けられたそれは、次々と浮かび上がる剣が杖の振りに合わせて雨の様に打ち出されていく。

対するミネットが下がりながら魔法を唱え杖を横に薙ぐと、地面から次々と氷の壁が生まれる。その一つに瞬く間に4つ剣が着弾して砕け散るが、既にそこにミネットはいない。

エドモンの側から見ると氷の壁は鏡のようになっており、どの壁の後ろにミネットがいるのか全く判別がつかない。エドモンはさらに剣を生成し、3つの氷の壁打ち砕くが全く手応えが無い。恐らくミネットの側からはこちらの動きが見えるようなしかけになっているのだろう。少し手間ではあるが、エドモンはさらに剣を生み出して氷の壁を次々と砕いていく。氷の壁もあと残り3つと言ったところで、ようやくエドモンは残りの壁の内一つに人影が飛び込むのを捉えることができた。彼はこれまでの細身の小さな剣ではなく、大型の剣を6振りも錬金し、その氷の壁に叩き込んだ。

だが、そこにもミネットは居らず、エドモンは舌打ちとともに残りの2つの壁を剣弾で破壊するが、しかしながらミネットの姿は何処にも見当たらない。魔法探知を発動しようとして杖を振ろうとした瞬間、ディテクト・マジック魔法探知が発動しようとして杖を振ろうとした瞬間、視界の端で空気が揺らいだかと思うと、突如ミネットの姿が現れ、素早く唱えられたエアハンマーにエドモンは横殴りにされて数メートルも吹っ飛ばされ、受け身をとりながらゴロゴロ転がっていつてしまった。

ミネットが姿を隠していた方法は単純だった。態と隠れている壁を露呈させた後、自分の目の前に裏表反対の遠見の魔法を展開し自

分のすぐ背後の景色を映し出す。もちろん近寄ってみれば、直ぐ違和感に気付くような代物だが、注意を逸らして回り込み側面から魔法を打ち込む分には十分効果があったようだ。

ミネットの決闘用魔法は、光を捻じ曲げ音を操り、視覚と聴覚を混乱させ、繊細な魔法操作で時にはメイジ特有の温度感覚や水流探知さえも欺瞞する大道芸なのだ。^{マジックショー}

エドモンを吹き飛ばしたミネットはさらに遠見の魔法を唱え二人が増える。横からみれば唯の魔法で作った映像に過ぎず、ペラペラなので本物と偽物の差異は一目瞭然なのだろうが、正面から並走して駆け込んでくる分には、瞬時に判別できる程の明確な差異は見取れない。

エドモンは真偽の判別を棚上げにして、両方に鉄塊を打ち込むが、ミネットの姿は2つともウラリとブレて消えてしまう。消えたミネット達のさらに後ろから現れた、姿勢を低くして駆け込んで来ていた本物のミネットが、素早くエアニードルを唱えエドモンの胸元に突きつける。

しかし、ミネットの戦術を読んでいたエドモンは、鉄塊を打ち出した後、間髪入れずに氷結の魔法を発動していた。ミネットもまた足元から生えている数多の氷の剣によつて前進も後退も封じられていたのだ。ここまで素早くエドモンの魔法が決まったのは彼の特性もあるが、散々砕いた氷の壁の破片が散乱している位置に彼がいたことも大きな要因だった。

二人は今までの真剣な表情から一転、笑顔になると同時に口を開く。

「「参りました。」」

まるで舞踏劇のような幕引きの決闘に盛り上がる観衆を余所に、二人は魔法を解くと、戦闘で荒れた地面を素早く魔法でならし、教師に捕まる前にフライで教室の方へ飛び去っていった。

「それにしても、何時もながらセンパイの魔法は卑怯だな。どーいう精神構造しているのか一回脳を搔っ捌いて見てみたいぜ。」

魔法学院の廊下をトテトテ歩きながら物騒なこと宣うミネットさん。

「大人顔負けの安定した質、しかも常人の二人分はある量、16歳にしてどーやったらそんな精神力が手に入るのやら。」

えっと、転生して主観時間で40年以上生きていれば？

「錬金や凝縮、念力、繰りみたいな基本的な魔法だけでドットメイジなんて歯牙にもかけない出力なんて、若い頃からそんなんじゃ、そのうち烈風カリンになっちゃうよ?」

気楽な口調のミネットと、キョロキョロとヴァリエールさんが聞いていないか注意を巡らす私。なんて迂闊なこと言うかな。

「今日だつて一応引き分けに持ち込めたけど、センパイは昨日の今日で未だ杖の契約が完了してないじゃん?」

まあ、そうだけど。今日使った魔法は全部ランブレが私の精神力を持って行って行使していたものだ。っーかそれが解ってるなら決闘なんて吹っかけず大人しく退いてくれればよかつたのに。

「そのとーり! エド君とアンブレちゃんは初の戦いでも息がピッタリ、相性バツチリ、比翼連理のコンビですから! ミネットちゃん

「んなんかとは仲良し度のレベルが違っんですから！」

4500歳のクセに昨日のことを根に持っているらしい大人げないランブレ。つーか、お前がヒヨコヒヨコとフライで学院探検していると、何時まで経っても杖の契約が終わらないんですけど、そのところ理解してる？ 比翼連理とか言う割に御主人様のもとを離れてほっつき歩いているのはOKなのか？ え？

「そういえば、ミネット、サッサと撤退してきたけど、ラ・ロツタ嬢だったか？ 例の妹スールの娘を放つてきてよかったのか？ なんか決闘の間もキヤーキヤー黄色い声でお前を応援してたが。おかげですっかり私が悪役だ。」

「妹スールっていうな。まあ、グラモン先輩の決闘を見て彼に惚れ直してくれれば御の字かな。ああ見えてあの陸軍元帥ド・グラモン卿の子息なんだろ、彼。」

「あー、なんとなくミネットがギーシュ君に喧嘩売った理由が解った。そういえば一俺より強い奴に会いに行く《こういう》奴だったな。」

明日の朝、ギーシュ君が平民に負けたなんて噂を耳にして微妙な半笑いになるミネットの姿が脳裏に鮮明に浮かんだ。

教室に向かう途中、そうだ、今日の決闘で学院内でのミネットちゃんの名度も鰻登りですし、丁度いい機会ですから『ミネット御姉様』ファンクラブを設立しましょう！ とか戯言を吐いて魔法で

飛んでいくランブレと、それを止めようとちよつとマジになって同じく魔法で素っ飛んで行くミネットは見なかったことにして、私は決闘騒ぎのせいで閑散としている午後の授業の教室に入った。

普通の婚約者 後編（後書き）

バトルのバリエーションを用意するのが意外と大変。というかオリ主達が喧嘩っ早過ぎる。

どこかに魔法戦闘の上手な書き方の資料が落ちてないものか。

それと、エド君の二つ名が微妙なのは自分でも力不足を感じるところです。誰か素晴らしい語彙の持ち主がもっと良い名を考えてくれるたりしないかな。こう、「カこそパワー」みたいな感じで。

普通の泥棒 前編

決闘騒ぎから十日程の時間が流れた。例の使い魔君は初めて見た貴族同士の決闘にかなりビビっていたようだが、念のために幾つか片付けずに残しておいた投剣を拾ってギーシュ君に勝ったようだ。結構ボロボロにされて二日程眠っていたようだが結構ピンピンして歩いているのを見たからきつと大丈夫なのだろう。相変わらず女子の区画から聞こえてくる絶叫と爆発音で順調にM犬に調教されている様子が全生徒に伝わっているが。多分、大丈夫、なはず。

ちなみに私とミネットがおこした決闘騒ぎで呼び出しを受けたりもしたが、アレは久方ぶりの婚約者との再会でちよつと激しく愛を語らっていただけで、断じて決闘ではなく、イチ口家ではよくあること、という具合に誤魔化して押し通した。誤解されやすい行動はくれぐれも慎むよう念を押されたが、コルベル教諭は頭を抱え、オールド・オスマンはどこか諦めの境地で私達を見ていた。今のうちに実家から魔法の胃薬を取り寄せて差し入れした方が良いだろうか？

ランブレは相変わらず学院探検をしていた。夜中に出発いたせいか、次の日に青髪の友人が寝不足気味で真っ青な顔をしていたので夜の探検は一日で打ち切りになった。さらに翌日、ランブレの夜中の探検の件を知った彼女に、私が杖でポカポカどつかれた。使い魔の行動の結果は主の責任になるらしい。

ランブレは暇になった夜にライフワークの本の執筆をしていた。今のシリーズのタイトルは名探偵ナノクシリーズで、決まり文句は「そうかわかったぞ、犯人はここで魔法を使ったんだ！」らしい。どうみても地雷のような本だが、意外とファンがいて、もう20年近く続いているシリーズらしいが。ちなみに実家の図書館にはラン

ブレの書いた本の原本が全部で一萬冊ぐらいあって、それだけで一つ図書館を作れる程だ。これから始まるであろうハルケギニアの大動乱も、いつの日か彼女が面白おかしく脚色しまくりの物語として執筆する日が来るのだろうか？

そうしてやってきた虚無の曜日、やっとランブレとの杖の契約が完成し、私とミネットは学院に程近い森にやって来ていた。

「なんでこんなところまで来なくちゃなんないんだよ、まったく。」

ぶーたれながら杖を抜くミネット。

「仕方がないだろ、このまえ呼び出されたばかりなんだから。少しは自重しないと、ストレスの溜まりすぎでただでさえ少ないコルベール教諭の髪がゼロになってしまうよ。」

二人して態々、地味な色のローブを羽織ってこんな学院の外まで出てきているのは、戦闘訓練のためだ。一年も実家に帰って無かったせいで私自身も勘が鈍っているし、ミネットはもともとバトルジヤンキーの気があるから、こうやってガス抜きしてやらないと上級生に喧嘩を吹っかけかねない。学院内でやると面倒事になりそうだし、面白がって参加しようとして来る奴も出そうなので、結局、虚無の曜日の夕方にこっそりと学院を抜け出して近くの森で行うことになったのだ。

ミネットの杖は、この前の決闘の時とはかなり違った様相になっていた。もともとミネットの杖は直径が3センチもある金属製の棒で、女の子が持つには太く重く、すっぱ抜け難い様に握りまですグリップいていたが、長さは20センチ程の物だった。しかし、現在はその杖

が2段階伸びて50センチ以上になっている。

「じゃ、そろそろいくぜ、センパイ！」

ミネットは15歳の少女とは思えぬ速力で踏み込み、魔法を纏わせたロッドを打ち下す。錬金で作り出した剣を右手に持ちエドモンは受けに回るが、ロッドはインパクトの瞬間に急激に減速しエドモンが受け流すタイミングを外す。次々と繰り出されるロッドの攻撃は、傍から見てみると打撃の瞬間に急激に加減速する、一見物理法則を無視したかのようなトリッキーな動きを見せていた。

確かに、ミネットの^{マジックショー}の大道芸は有効な戦法だが、初見でなければ対処法は幾らでもある。真に厄介な『幻惑』の真骨頂は近接戦だった。彼女はロッドや腕の周りに空気を歪める魔法を纏い、ほんの1センチ程度ほど認識をずらす。打ち合う側としては、インパクトの直前にリーチや打撃位置、打撃タイミングが急に視認内容とずらされる様に体感するので、非常にやっかいなのだ。それを彼女は繊細な出力調整を施し、腕の振りと実際の軌道とインパクトのタイミングの差異が一撃ごとに毎回変化していく彼女の攻撃は、ロッド捌きの腕と相まって非常に受け辛い。

胴薙ぎ、突き下し、逆袈裟懸け、唐竹、突き上げのように繰り出される連撃の中でも、斬撃はタイミングをずらし、突きは位置を欺瞞して紙一重でガードを摺り抜けさせる。エドモンの剣でのガードが抜かれる回数が少しづつ増え、其のたびに彼は回避の為に体を振り、体勢を崩されてはどんどん余裕がなくなっていく。これでもエドモンは体内の水の流れを操作する強化の魔法で基礎能力を底上げしているのだが、速力、膂力共に劣っていることをものともしない近接戦闘能力を彼女は手にしている。故に彼女は一五にして『幻惑』などと呼ばれるようになったのだ。

しかし、戦闘の終結は意外な形でもたらされることとなる。明るい女性の声でエアハンマーが唱えられると、エドモンの左手から圧縮された空気の塊が飛び出し、ミネットの腕からロッドが弾き飛ばされる。

「やっぱりそれズルいつすよ、センパイ。」

納得いかない表情で文句を垂れるミネットを横目に、ご機嫌な声を上げるのは先ほどエアハンマーを唱えたランブレだ。

基本的にメイジは同時に二つの魔法を使えない。ランブレはその原則を完全にぶちぎるマジックアイテムなのだ。彼女は意志を持ち、人の精神力を使って系統魔法を行使することができる。それに加え彼女が召喚される時、コントラクト・サーヴァントでは必ず『同調』のルーンが刻まれる。普通は使い魔がメイジの目となり耳となるというのがハルケギニアの常識だが、このルーンのおかげで彼女は感覚の逆共有をかけることができる。まさに主と一体となり、情報処理能力と感知能力を底上げし、魔法の同時運用を可能とする第二の脳とも言つべきものを主に与える、それがランブレの役割である。

「私も本当は使うつつもりは無かったんだが、やはり一年もまともな戦闘訓練してないと鈍るものだな。だがそれを考慮に入れても、たった一年でミネットが強くなりすぎなんだと思う。」

「やー、それほどでもー。」

棒読みで、プイツと顔をそむけるミネットだが、褒めらるるのはやはり嬉しそうだ。

「まあでも、二の家^{ジロ家}の家訓『戦いを回避する努力を行わない者は敗北主義者である。』は何処に行ったんだって感じだけだな。」

「へ？」

「そもそもメイジが乱戦に巻き込まれるような状況になる前に撤退を検討すべきである、つてのがお前の実家の戦術論の講義の根幹だったような気がするんだが。」

「うげっ。」

「この前も入学早々いきなり決闘騒ぎに首を突っ込んだ挙句、戦闘時もアウトレンジから魔法を打ち込まれているのを無理やり突破してインファイトを仕掛けて来るし。」

「うちの父様みたいな説教は勘弁だぜ。」

「ま、その辺も次回の訓練からミツチリやるから。」

「うへえ。」

さつきまでの元気はどっかにすっ飛んで行って、急にぐったりとやる気を無くすミネット。空中に風魔法でベッドを作ってダイブし、頭を抱えてゴロゴロし始める。そういう所は本当に無駄に器用なのに、何でこんな性格になったんだ？ ミネットはタレた状態でどうか話題を逸らそうと知恵をフル回転させ始めているようだ。それを邪魔するようにランブレはミネットの周りを楽しそうに飛び回り、時々首筋を羽でこしょこしょ撥っている。此奴も時々、本当に4500歳なのか疑わしくなってくるなあ。

「なーなーセンパイ、夏休みは五の家ゴロ一家の爺様とまた狩りに行くぞ！　なんか最近ガリアの方で吸血鬼やミノタウロスが出るらしいんだよ。三の家サン・シロウ家の連中がサンプルに欲しがってたし丁度良くない？　アタシとしては最近、北の沿岸部に出るつつー、海竜の亜種ゴロみたいな奴も興味あるんだけどな。ついでに海水浴もできるし。でも五の家ゴロ一家の連中は主力は火メイジだから、あんま乗り気になんねーんだよ。水メイジのセンパイが来てくれるなら百人力だぜ。」

逸らした話題が早速それか。バトルジャンキー極まれり。ミネツトはどこまでいってもミネツトのままだった。

「まあ、そんな暇がとれたらな。」

「でもアンブレちゃん、吸血鬼はあんまりお勧めしません。奴ら人に紛れるのが上手ですから。実際は、精度良く採血検査すれば一発なんですけどね。でも、吸血鬼の出る町で血を抜いて回るなんて言ったらそれこそ暴動になっちゃいますし、すっごく面倒くさい連中ですよ。炙り出すだけで夏休み半分以上潰れちゃうんじゃないですか？」

「あーそれはヤだな。アタシは吸血鬼パス。」

確かに、それしか方法がないならどんなに大変なことでもヤル気は出ないこともないが、明らかに楽な道があるのに通れないのというのは気が滅入るものだ。

「ま、夏休みの予定なんてゆっくり考えればいいだろ。」

出来る限り原作通りに進んで欲しいが既にバタフライも吃驚な変化が出始めている現状では、夏休みなんて本当にあるのかさえ疑わ

しいのだ。そろそろ辺りも暗くなってきたのでミネツトをベッドから下ろしてローブを羽織り直すと私達は学院へ帰る為に森を出た。

すると、目の前にはこんもりとした土の山、空には風竜、降ってくるは火の玉。ファイヤーボール
胃薬が必要になるのはコルベール教諭よりも私の方が先かもしれない。

普通の泥棒 後編

目の前のゴーレムの残骸らしき土の山とそれを追ってきたであろう風竜、恐らくこの組み合わせは現在トリスティンにその名を轟かせている盗賊・土くれのフーケによる破壊の杖強奪事件なのだろう。でも、この事件ってアンリエッタ殿下がいらっしやる時におこるんじゃないかったっけ？

そんなことを一瞬考えてしまったのがいけなかった。気付いた時には、となりでミネットが既に魔法を唱え終わっていた。風の槌が火の玉を爆散させ、高度を下げていた風竜を掠めて空の彼方へと消えていく。

相手が誰か知らないからこそ、ミネットはまず状況把握を諦め、とりあえずまず敵らしき奴を倒すという結論に到ったのだろう。さて、どうしたものか。ベストなのはミネットを説得して攻撃を止めさせ、相手も説得して誤解を解く。攻撃も1発だけなら、誤射かもしれない。

うん、すごい面倒だ。それに、問答無用にフーケ討伐編に巻き込まれるだろう。というか、ミネットが聞いたら真っ先に討伐隊に杖を掲げそう。フラフラと平衡を保っていた天秤が一気に傾いた。決定、その案は却下。どうせもう反撃してしまったんだし、適当にボコってお帰り頂こう。誰かが振り落とされるような事態になったら、あのメンバーなら友人の命を優先するはず。シルフィードは風竜と見せかけて、実は先住の魔法を使える風韻竜だし、滅多なことでは死人も出ないだろう。

人、これをヤケクソと呼ぶ。

ミネットが応戦している間に、エドモンは周りの木と地面から大

きな紙を生成する。ランブルも心得たもので紙片に次々と固定化の呪文を施していく。それらがあつという間に貼り合わされて大きく無骨な箱状の物体が出来上がる。それらが次々と合体しワイヤーケールで結ばれ、たった数十秒で出来上がったのは、全高20メートル程の三頭身のヒトガタ、四角い身体にまんまるおめめと三角形の口がキュートなダンボ だった。相手に火と氷が使えるメイジがいることを考え、三層構造の耐水段ボールの表面に難燃シートを貼り合わせたもので、総重量二千リールという巨体だ。

二千リールというとても重い重量の様に聞こえるが、メイジにとって実はこれは大した重さではない。例えば四つのメイジのランクの内一番下であるドットメイジのギーシュ君は、青銅でできた女騎士の形をしたゴーレムを使役して戦う。もし人間の女性を一人丸ごと青銅の塊に置き換えたとしたら、その重量は千リールを超える。戦闘用に軽量化はしているだろうが、近接戦闘での最低限の強度を備えるなら三百リール以下には出来ないだろう。それを彼は同時に七体出して戦闘を行わせることができる。

どんな屈強な男でも三百リールの銅像なんて、二つも担げばまともに走ることもままならないだろう。それほどまでに魔法という力は高出力なのだ。系統魔法の使えないゼロのルイズ以外、例え風魔法を苦手とする土系統のドットメイジさえ、歩くよりフライで飛んだ方が速く移動できるのはこのためだ。

ダンボ (大) はその巨体に似合わず軽快な動きで、飛んでくるフレイムボールをちよつと焦げながらもたたき落とし、表面に突き刺さる氷の矢も全く意に介さず、空を飛んでいる風竜に向かってパンチを繰り出す。それをヒラリと避ける風竜に、高度を取らせまいとその頭を抑える様にミネットの風の刃が襲い掛かる。そのルーチンを十度繰り返し、とうとう風竜はダンボ (大) のルーチンを完全に見極めたようで、ダンボ (大) の拳がギリギリ届かず、ミネッ

トの魔法も当らない空域を縫うように飛び始める。

しかし、それこそが狙いだ。ダンボ（大）の一三度目のアタックが躲された瞬間、ミネットはダンボ（大）を横殴りにエアハンマーで吹っ飛ばす。ダンボ（大）のパンチを躲し、頭部の横をすり抜けようとしていた風竜は、ダンボ（大）の顔面に突っ込み、目の穴の強度が弱くなっていた辺りを破壊しながら箱の中に消えていった。すると、直ぐにドンという音とともにダンボ（大）が少しよるけ、口元から悲鳴が上がる。内側の壁は穴が無いので、突き破れずに激突したのだらう。衝撃吸収力に富んだ段ボール製だから即死はしないだろうが、あの勢いでぶつかったらムチウチぐらいにはなるかもしれない。学院の医務室の水メイジは優秀だからきっと大丈夫、だと信じたい。

ミネットに視線をやると、彼女も既に相手が学院生なのに気づいていたようで、この隙に撤退するのに異存はなさそうだ。ランブレはダンボ（大）に魔法でデカデカとフーケ三世とサインを入れている。本人まだピチピチの23歳なのに、孫がいるなんて噂が広まったら泣けるね、ミス・ロングビル。

こうして、私たちはなんとか原作イベントに巻き込まれるのを回避し、まったり学生生活に戻っていったのでした、まる。めでたしめでたし？

あ、そういえば、フーケは原作よりブチ切れていて超強かったそうですね。ですが、新巻のフーケ三世を警戒してコルベール先生が引率に加わったので意外と楽勝みたいだったです。

あれ？ 原作変わりすぎじゃね？

普通の泥棒 後編 (後書き)

違うんだ！ 会話が無いのは声で正体がバレたくなかったからなんだ！ (文才が無い言い訳です。)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9436y/>

ただの、どこにでもいるふつうのメイジですからっ!

2011年12月15日00時48分発行